

25-66

特67
813

俗通
普通
習字
講義

骨

骨

骨

骨

骨

骨

骨

骨

骨

骨 正 普通

骨

骨

骨

骨

骨

骨

骨

骨

骨

骨

骨

通俗普通習字講義

文字といふものは、無論實用から起つたものであるが西洋の文字とはちがひ、
書から美術的に精神的に取扱はれて來たのである。

精神的に取扱はれる人の文字は少々ヘコナリでもそんな處へ目をつけて尊重
するのではないので、實は其人物を崇拜敬慕の餘りに尊重するので併し立派な
がかいた文字はとういふものか文字は拙なくてもたしかに一種特別な非凡の
氣韻を含んで居る。即ち精神的に取扱はれて居る書には美術的のよりも實用的
のよりもちかき一種の或者を含んで居る是れ余の美術的より放して精神的のと
いひたる所以である。されば精神的に取扱はれんとする書をかく人は資格がな
ければいかぬのであるから、自分から求めて精神的に取扱はしめんとしてもそ
は駄目である。併し美術的に取扱はしめんとならばそは出来る。即ち美術的ら

しい文字を書くに若くはない。そんな文字をかくのは、専門習字により学ぶに若くはない。

二
実用的の書は一般に速且正に。出来るならば多少美術的にかいてある様にといふが要求されて居る。この方の書の習字は何分皆さう多くの年月をかけて居られぬから、短い一定の期間に極普通の習字をなし、即ち大抵一般実用的の書を學習し得て満足するのである。これには一通り理論を聞いて置いて實地の練習と並行してやれば効果を收めるに於て少からぬ便利があるであらうと思はれる。無論極奥行を短くしてあるから、もつと深く知りたいものは十分と研究して自知すべきであるが、普通習字に於ては是れ以上間口は知るべき必要がない。

◎精神

字を書くには、第一に精神を落付けて何事も思はず、只一意専心に習ふべきである。

ある。

◎姿勢

正しき姿勢に非れば適勁なる筆勢は生ぜざるもの。腰掛によるものは十分腰掛を前に引き、両足を揃へ、左手は机のふちの邊りに置き、腹と机とすれる位を程度とし、上体真直、頭のみ少しく下に向け目と紙との距離は一尺乃至一尺二寸迄とし、筆は右眼前面線上にある位を可とする。座る時は兩足の拇指を重ねて座る外上體頭等すべて前の通りである。

◎執筆法

運筆の前に定むべきは執筆の方である。種々あれ共普通に行はるるは雙鉤法である。雙鉤法は食指と中指とを前方より淺くかけ拇指は後方より稍深くかけ無名指は中指の下へ爪岸の處をわけて置くそれに小指をそへて下に置く。掌は可

成的虚にしてしかも寛なるを尙ぶ。この他單鉤法撥鏝法等種々ある。

◎腕法

腕の置き所に三種ある即ち懸腕提腕枕腕である第一は臂を舉げてかくをいひ大字に適し、第二は臂をのせておくをいひ細字をかくに適す。第三は臂を机に軽くつけてかくをいひ。中字をかくに用ふる。

一枚に十二字位迄の大字には懸腕が差支なからうと思ふ。要するに懸腕によらざる腕法にて大字をかかんか筆勢澁滯飛動せざるべしといはれてをる。

◎運筆法

既に執筆法腕法と知得したれば次は運筆法を習はねはならぬ。運筆法は筆の運び方である。この筆の運び方は字をかくの最も始め何流にまれ流に入の門なれば是に於て十分に注意をすべきである。先づ運筆に裏表といふことがある。次

には虚書といふことがある。表とは筆の曲りたる時の毛先の方、裏とは其反対の方で是等を正偏ともいふ。虚書とは何の書をかくにしても必ずや遠くより書をかき來り始めて紙につくその遠くよりかき來るそれを虚書といふのである。次に筆の毛先は真中にありといふ學者もあつたが今日の實際を見れば何時も真中にありとのみ限つて居ない。又書體により流派により一致せず。

◎楷書

楷書如立といへば、書く法も亦従ふて嚴正なるべきである。

先づ楷書の基礎ともいふべきは点畫である。其点畫といふのは古來永字八法といふて書法の秘訣であるといつて居たものに更に八法を加へたものが多いが、ここには一般に行はるる習字帖に見はれたる点畫法を大方持出して見やうと思ふ。即ち

第一を側といひ、筆さを軽く側て、斜に右方に引き爰にて筆を左へ轉じて更に左へ向ひはらふのである。筆さは、はねる前に△の處にある。側てる時の勢は矢の如く右斜上方より來る。

三水、ウ冠などはこの法。

次が勒で先づ点を作り夫れより中高に両端低うするの目的を以て右方に引き右端を筆心でおさへ、軽くはねるやうにして左方に抜く。押へた時筆さき△の處にある。尙最初の点は勢矢の方より。柴担じやの竹節じやのといふ中ばそになるを思ひ。子孝者などはこの法

第三は努で勒をうらかへしさまにして左端を其位置に止め右端の垂れたるを見るが如くする。即ち最初左下斜方からくる虚畫の点に始まり其上を稍中間左にそるかそらぬか程の意を以て直下に引き扱筆心にて一寸筆を押へ

上にぬく。点から直に肉づく事と中間の細きとを思ひ。筆さき△の處にあること同上、折下などはこの法。

次は趨で初め努に起れ其最後の時に筆をぬかずして一寸筆を左下に押へ扱しづかに癖づかぬ様大切にはねる。はねるには筆をまき意。

次は策で勒を二つにきつたやうでビューとはねるをきらひ、筆心仰ぎあがるべきもの。斜上に勢がむく下におさへるを思ひ。耳、身、孔この法。虚畫右斜上方より。次は掠で虚畫左下斜方よりくる点に始まり努の如くに点の上を圖の如き筆意にて左斜下方にひき巻き上げるやうにして筆を一つにまとめとる。筆心左邊。ビューとはねない。鼠尾の如くなるのが思はれてゐる。太、イ、勿などはこの法

第七が啄で点を強く右方に打込み、其上を勢鋭く総身の心を込めて左下斜

方に筆をよせぬ。筆心左邊。竹、須などこの法。一氣に手際よく鋭くかく。

第八が礎で虚畫右より來る点に始まり、其上を一寸右方へ次に漸次力をこめて純粹なる右下斜方へ引き筆を一寸とめ而して筆を右邊の端にてよせる意にて右方にはねる。全體を三折にしかも角立たぬやうに運筆する。三折法とはこれである。之繞、永、人などこの法。

以上は古來書家の襲用せる永字八法。近年尙更に色々の法を加へて書かしめる者がある。大體左の諸法である。

第一は龜頭といひ虚畫下よりくる点にて勢強く打込其上を筆心にて押へつゝ下の極僅か左下斜方にひく筆心中長さを忘む。言、ウなどこの法。

第二は三勒で三畫共に同じ様にあらざるもの。上仰中平下覆で又隣勒平勒

覆勒ともいふ。曲直の調和がうまくできてゐる。各畫間均一。三畫同様に引張つたなら積薪病といふものになる。三、年、業などこの法。

次を懸針といひ初め努法を用ゐ最後に靜かに両邊より中央にて收めて宛かも針の尖の様になすもの。一氣呵成に出来るものではない。腕をきめて慎重なる練習を成すべきである。中平年などこの法。

第四がワ冠で勢左下斜方より來れる点に生まれ共打込めばすぐ下方稍左斜方へひき止め畫の頭へ向けぬく。ぬく時筆さき△の處にある。次に勒、勒の終りに一寸筆を右下斜方にひきまく意にて超す。第一畫は長きを思ひ、冗、雪、軍などこの法

第五は獅口といつて、勒より努、寧ろ少し右ぞりした努に轉し努より超となる。勒の打込点は少し強く虚畫は矢張り右上斜方、次に勒より努に努よ

り起に跳れも轉する時は一寸筆をひくこと前の如しである跳ね口は流派に
よりちがふが勒の左端へ向ふ。肉のかけかけになるのを要らざる。爰も十分
の練習必要。勿、刀、爲などこの法。

第六は塔勾といつて短き努に起り終りにて例により右下斜方に引き改めて
右上斜方に向つて長くはねる良、長、畏等この法。

第七を浮鷲といひ腹を出した努より徐かにいつのまにか勒に轉じ勒より起
となる。起は左邊に筆を集め上方を向ふのであるが聊か左へまく意をもつ。
起は爰では肥え而かも鋭きを喜ぶ。

第八は飛雁といつて先づ虚畫も点も努の如く次に少ししわりて右下斜方に
走り筆をとめ更に例のはねる準備をなし筆を興して徐ろに稍内方にはねる
谷間の松の倒れんとするが如きにたとへらる。成、或、武等この法。

其他鳳翅、綽勾、垂露、三撇、重撇、之繞、連火散水鐵城等がある。

憶ふにどんな文字でも皆以上の点畫又は以上の点畫の變化したものが集つて成
つたものであるから、十分練習をして置けば、他日之を合したる處の文字を習
ふに當りても只結體法即ち組立法さへ習へばよいといふ譯のものである。

それから他日教案を作る時などこの点畫法の名稱を用ひて誌さば短い言葉では
あるし、何かと便利が澤山ある。

◎間架結構法

間架結構法とは今は一語になつてしまつて總て文字の形を組成することをいふ
やうになつてきた。この法は先づ文字を美的にくみ立つる法で文字の中心点や
文字の外形を發見させる尙文字はよく小學校でやつてゐる彼の向背直() ()
|| () の三つで先づ説明できるが是れで説明できぬものは △ ▽ ▴ ▾ ◊ ◩ ◪ ◯

などの如きかたの入れて説明するもよからう。

但し字畫の多少偏傍の關係によりて又特別の法がある。古から夫々何十法といつて流派により多少はちがふが今其要を左に摘録しやう。尤も横畫は何れの文字の時も分間均一で又少し右上りとなるのである。

- 一、發、炊、退、茶、波筆重ナレバ二個ヲ一個ニ減ジテ擦フ。
- 二、林、森、利、謝、趨(勾)ノ重ナルモノ、前ヲトドメ後ハハチル。
- 三、願、羽、茲、難、兩平トイツテ左右ヲ均シクシ並立シタル如クス。
- 四、御、側、瓣、術、三並トイツテ中間ヲ正シクシ、左右ハ相拱クヤウニス。
- 五、郡、助、勅、初、左ヲ高クシ右ヲ低クス。
- 六、時、讀、續、張、右ヲ伸バシ左ヲ縮メル。右筆ト曰フ。
- 七、吸、隊、晦、峻、偏小ナルモノハ上部ヲヒトシクス。(上平)

八、如、知、細、紅、旁小ナルモノハ、下部ヲヒトシクス。(下平)

九、走、足、定、走、偏ノ有無ニ不拘下平ノ文字。

十、昌、呂、圭、畠、上ヲ小ニ下ヲ大ニ作ルベキモノ。(上小)

十一、患、萬、禹、衆、(上窄)上ノ方ヲ窄クカク。

十二、智、普、雲、界、(下窄)上ヲヒロヤカニ下ヲ窄クカク。

十三、豈、且、豆、孟、(地載)畫ガ皆一ノ上ニ托サレル。

十四、文、交、父、史、(承上)上ノ中点ヲ下ノ開キノ交差点ト相タイシテカクベ

キモノ。

十五、母、勿、力、乃、(斜體)ナレドモ中心ヲ失ハヌ様。

十六、宛、寬、宅、冠、二句、俯勾ハ小仰勾ハ大

十七、宇、官、宙、害、(天覆)トイツテ下ヲオヒツクスヤウカク。

- 十八、善、喜、吾、亡、(讓横)横ノ一ヲ長ク作りユヅルモノ、
- 十九、平、年、軍、羊、(長鋒)タテノ針ヲ長クカク
- 二十、申、巾、市、申、(正鋒)縦針ヲ其中ニ正シクカク
- 廿一、上、下、工、士、(横長)タテ短ク、横長シ。
- 廿二、才、身、月、片、(縦長)タテ長ク、横短シ。
- 廿三、卯、艸、拜、弗、(右長)右長クス
- 廿四、五、正、亞、並、(重一)上ノ一ヲ短ク作り下ノ一ヲ長クス。
- 廿五、森、霖、品、森、(重疊)上一体ヲ少シ大キク作り、下二体均衡ヲトル
- 廿六、衡、擲、衝、蕃、(中大)中ヲ雄々シクスル答モ同ジ。
- 廿七、縦、免、辨、衍、(中小)中ヲ謙遜サセル
- 廿八、鳥、馬、爲、焉、馬齒法ハソノハチ口ヲ四点ノ半ヘ向ケル。

廿九、同、自、因、岡、(四直)右短左長。右肩少シク張ル。

三十、亦、然、淡、無、(集点)点多シ變化スベキモノ、

卅一、及、友、妙、皮、(重撇)撇重ナレバ各々筆勢ヲ異ニス。

卅二、恩、息、必、志、(横才)曲ツテモカマハヌ。

大体以上の如しであるが、書く間に書と書と組合す時注意すべき点は前の書未を稍細く作る事である。是等は手本につきて臨模しつゝある間に多少は自然と會得するではあらうけれども、普通習字では速成であるから、何でも要めな所のみ豫め聞き置く必要がある。

次は文字の配置なり。イクラよい文字でも文字の配置だに悪しからば見られないうであらう。であるから、手は粗末でも配置には心をつけてかくべきである、其他に注意すべきは只用具のみ。用具も注意せでは折角の腕もふるふこと能は

ぬであらう。

◎行書と草書

眞書如立行書如行草書如走とあつて行書は少しく連綿の跡がなければならぬ。行書には、楷に近い行、草に近い行の二種あつて、共に實用上には、楷書よりも必要である。楷は筆鋒をあらはし行は筆鋒をつつみ、次の点畫へ直ちに連続し、宛如一畫の如き所迄ある。書法は大畧楷と同法。されど楷の先きに習ふべきものでない。

草書は實用上最も必要なもので、楷より先に出来たもの。篆隸の筆法が遺つてゐる。書家によりては点畫から始むべしと唱へて居る者もあるが、余は草書なるものはさる部分的の練習をなさずして初めより練習にかかつた方がよからうと思ふ。但し無論簡單より複雑に進むべきである。

草書は走るが如しであるから、楷の如く餘り角立ちすぎてはいかぬ。圓くぬぐりてかくことが大切である。

草書は楷に比べればまるつきりちがつて素人には一寸分らぬ字もある解、辱、辭辨の字の楷草など其の例である。

草書のくづし方は自分勝手にくづしてはいかぬので、古人のくづし方によるべきである。

次に草書にても亦中心を失つてはいかぬが楷書の如き中心をとつてもいかぬ字もある。年、事、花などの如き現にそれである。草は手の如き縦に横畫のある年、承、壁、津、拜、などの如き皆手の草書の如くかく。これは圓轉の際かく遂に筆畫減じ變形したものである。併し圓轉の際變形せりとはいへど、又配列の際自然とこんなヒドイ草字になつたものもあらう。

草は連綿する場合が多い。それで走る如しとも見ゆるのであらうが、この連綿といふのも少し注意すれば至極見よい物になる。即ち餘り畫の密なる草が一所になつてはゐかぬ。又餘りに粗になつてはいかぬ。密漸く粗く粗やうやく密になつて循環するので恰好が取れる。併しこれでは字の大小同じで又見榮えがな。依て畫粗なるに従ふて稍形を小にするるとよい時もある。

次は距離で斜の如きは可成並行する様かく等、余り字と字との距離に遠近が出れば見苦しい。

又其次は其何字かを可成長い一草字化してしまふのである。即ち可成先きの字の末を利用して次の畫の始めとしたり、又は直に之を虚畫に用ふるのである。字を上手にかく人はこの連綿がうまいのである。又時によりてははね口より直に次の畫に續けて見苦しくない。其他連綿については尙注意すべき点多々ある。

草書を覚えやうとするには何より先づ草書の手紙の文の手本をかくより外に方法はない。更に特別なる文字は草書淵海だとか五体字書とか、草字彙とか、草書韻會、正續楷行草字典などあるが、この中一つでよからう。序に書法の本の名もあげやう。小野鷲堂の習字科講義。照井萬湖の書法講話。石川鴻齋の書法詳論。西脇吳石の三體千字文書法。井田秀生の書道手引。位の中一つがよからうと思はれる。無論以上は漢字に就ての書法である。近頃無暗に得手勝手な誤本も澤山出るが餘り信するに足らぬ。寧ろ古本の方がよろしい。

扱習ふには決して走る如く早らとやつてはいけない。やはり心をこめて一点一点畫苟くもせずかくべきである。而して其筆順は楷書とは樂でよく分る。例せば重、無、主などよく分る。而して楷書の筆順もこれで推される。それから楷書にそんな事はないが、草にはよく似た字が澤山ある。既、免、津、律、體、禮、など澤

山ある。要之ひどい連綿草文になつてくると學力によむので草書ばかり知つて居ても讀み下されぬのである。

其他草書には多くいふ事もあらうが夫らは練習の際自然に會得するであらう。

◎平假名

昔から使用されてきた草假名の數といへば其數二千にもなるだらうが實用上にはそんなに多數は知る必要がない。左記位覚え居れば結構である。

越	利	弊	八	以
王	里	遍	半	伊
倭	怒	登	葉	路
我	流	東	耳	呂
果	累	暹	爾	露
可	類	千	本	盤
嘉	乎	知	保	者

與	連	通	奈	牟	能	具	氣	故	亭	幾
餘	麗	都	難	六	濃	屋	遣	許	阿	支
代	所	川	樂	雲	農	耶	希	衣	佐	遊
堂	楚	禰	良	宇	乃	也	介	盈	散	由
多	會	牟	羅	有	廼	末	婦	愛	斜	免
當	津	那	舞	井	九	萬	布	傳	起	米
禮	徒	南	無	位	久	滿	古	帝	喜	美

三、見、志、新、四、之、術、
日、悲、飛、非、毛、裳、母、
茂、世、勢、春、須、洲、數、

是等の假名を知つて居れば草書を覺える一つのたつきにもならう

現在普通教科として用ひらるゝ平假名は我國唯一の國字で其數僅かに四十七字で別に片假名といふものがあるが、假名としいへば平假名をいふことになつて居る。この假名ももと草書の轉化したものであるから矢張り其面影が残つて居る。實に立派なもので何處へ押し出しても恥しくない國字は只此一あるのみ。之を學ぶには如何なる初歩の者と雖も容易に習ふことを得。且つ之をかくに、そんな高尚な處へ出し又高尚な事をかくのでも格別品格が下つて見えぬ。

い(以) ろ(呂) は(波) に(仁) ほ(保) へ ど(止) ち(知) り(利)

ぬ(奴) る(留) を(遠) わ(和) か(加) よ(興) た(太) れ(禮) そ(曾)
つ ね(禰) な(奈) ら(良) む(武) う(宇) ゐ(爲) の(乃) か(於)
く(久) や(也) ま(末) け(計) ふ(不) こ(己) ぬ(江) て(天) わ(安)
さ(左) き(幾) ゆ(由) め(女) み(美) し(之) ゑ(惠) ひ(比) も(毛)
せ(世) す(寸)

右の如く草變したるものである。夫から假名を習ふ者は後世假名書の祖とまで仰がれて居る小野道風及行成、佐理の三人は日本の三蹟と世に稱せられた事、貫之のつづけ書の美しき事、御家流の事、平安時代は假名の極盛期であつた事などは知りて居る必要がある。

草書

平假名

模様假名

尙この外、なにはづの歌、あさか山の歌の二つは往古手習ふ始めにしたといふ

事や、草書は雄勁といふことが必要であるが假名には優美といふことを尊ばねばならぬ事がある。

和歌の書き方などについては古來畧々一定の書式がある。

婦人常用の平假名の續け書などは全く調子一つで筆が走るものであるから其調子の解らないものには却々思ふやうにはかけない。假名の連綿は大體草をかく注意に似て居る。何分今日は既に模様假名となつてしまつて模様のやうに奇麗に見えさへすれば、この假名はよくかいてあるといふ。又美術的に出來て居るといふ誤評者もある。兎に角今様になつて、一つ其書方上に關する主なる注意項目をあげて見やうに、

- 一、草より肉細なる事、餘り肉太にては却て美を損す。
- 二、優美なるべき事、かくには心よりしてやさしくなりてかゝねばならぬ。

三、精粗適宜なるべき事、餘り一處へこめたり又はわかしたり又は畫多きかな乃至畫少きかなを一處へよせてはいかぬ。

四、連續利用の事、前畫末を利用し後畫の始めとなす。

五、廣狭の事、かきたるゝどが漸次廣く漸次狭くあるやうなとす。

六、接墨に注意する事、可成かける丈かくこと

是等の事も假名をかいて居る間に自ら會得するものである

◎片假名

我國が彼より漢字をかりて國語を記し始めてから無文字世界より有文字世界となつて其當時は便利であつたが段々世が進むに従ふて畫の多い文字を一々正しくかいて居られない。依て勢畧字を用ふる事が始まつた。畧字を用ひて見れば、一會便利である處からして益々流行した。阿がㇿとなりㇿとなり遂にアと迄畧

書するに至つた。併し片假名は尙劇しき世の中にマダルク感せられた、そこへ前の平假名といふ者が出来てから時代によりては殆んど生命を失ふ處迄やられた。がこれとても中々下へは置けぬ代物で、どうしてこの様な重寶な品物は無い。片假名は楷書の筆法を具へて居る(大体)。唯波勢だけがない。例により原字をかいて見やう。

- イ(伊) ロ(呂) ハ(八) ニ(二) ホ(保) ヘ ト(止) チ(千) リ(利)
- ヌ(奴) ル(流) ヲ(乎) フ(和) カ(加) ヨ(與) タ(多) レ(禮) ソ(曾)
- ツ ネ(禰) ナ(奈) ラ(良) ム(牟) ウ(宇) キ(章) ノ(乃) オ(於)
- ク(久) ヤ(也) マ(末) ケ(介) フ(不) コ(己) エ(江) テ(天) ア(阿)
- サ(散) キ(幾) ユ(弓) メ(女) ミ(三) シ(之) エ(慧) ヒ(比) モ(毛)
- セ(世) ス(須)

簡單なる楷書と見て楷書の前に練習するが可なりと思ふ

◎所謂八病

古來所謂八病筆勢とは左記の如きものである。注意してかかぬ様にするがよろしい。

- 一、牛頭
- 二、柴担
- 三、稜角
- 四、折木
- 五、竹節
- 六、鶴膝
- 七、蜂腰

八、鼠尾

◎運筆順

文字をかく筆順は昔より一定して居らぬ、或者は草書によりて順を定め、又或者は字源によりて定め、又或者はかき易さによりて定むるなど殆んど一定して居らぬ、今も尚その通りであるが、何分學者の如何を見てかき易い順にしてかかしむべきではあるが、かいた成績から見ればどれも甲乙なしであるから、畢竟人々の考へによりて自分本位でやるべしである、但し余は草書順である。

◎文字史

支那文字

- 一、古文時代
- 二、篆書時代

- 三、隸書時代
- 四、所謂五体時代
- 五、楷書時代

日本文字

- 一、輸入時代……………奈良朝以前
- 二、進歩時代……………奈良朝ノ頃
- 三、完成時代……………平安朝ノ頃
- 四、整理時代……………鎌倉幕府ノ頃
- 五、衰頹時代……………足利將軍ノ頃
- 六、不統一時代……………徳川將軍ノ頃
- 七、實用時代……………明治維新後

◎手と眼

それから字をかくには眼の方が手よりも少し進んでゐる方が至極よいので、と
うかすると手が目よりも進むことがある。此時は自己の成績が非常によく見え
て別に缺點がない様に見える。これ一つは根性骨にもよるならんが何分目が手
より後れて居ること儘かである。この目を養ふといふことは極めて大切でこれ
は古今の名筆を見ても養はれるが又一つは粗末なものを見て缺點を知るといふ
ことも養ふ事になる。次は目が余り肥えて先きになりすぎるとあせりて只一概
に速成のみを望む様になる習字には無法の近道といふがないとどうしても一通
の練習をしなければならぬのだからして。目のけいこの外腕の練習を怠らざる
べしである。

◎手本

手本は肉筆にこそすものはない。やむをえない場合ならば刷物でも宜しい。而し
て一旦名家の手本を刷物でも肉筆でも定めた以上は中途にかへぬがよろしい。
今の小學校や中等學校のやうなのは大層よくない。それで初め定める時は十分
先輩に携びもらふがよからう。しかしこれは獨學の人に就ていふので。入學者
は學校のより外を用ひては宜しくない

◎所謂調子

横井博士の字をかく秘訣は他に非ず調子をのみこむにありといはるゝ調子とい
ふのは運筆の速さおそさの事をいふのであらう即ち其書き手の筆くせを知るの
である。かういふ處からして肉本がよい、或は師授がよいのといふのである。
百聞一見にしかずで成程聞いたより先生のを一邊見た方が會得される。それか
ら又會得の巧拙によつて其模倣の巧拙即ち先生の手を盲くかけるとかけぬとの

明治四十四年四月
明治四十四年四月

日印刷
日發行

(非賣品)

著者 速成書法研究會

發行者 富山市中町二十番地 小林伊八郎

印刷者 富山市常盤町三番地 山田常太郎

不許
複製

071391-000-8

特67-813

通俗普通習字講義

速成書法研究会 / 著

M44

CED-0995

